【優秀論文】

未来につなげる復興

～東日本大震災から考える本当の復興～

３年４組　３２番　濱崎　友香

Ⅰ　はじめに

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災発生から早くも 4 年以上たった今、関連する報道が減り、思い出す機会を失ったことで、東日本大震災が発生したことを徐々に忘れてしまっている人が増えている。しかし、いまだ全国で約 19 万 1 千人もの避難者がいる[1]。東日本大震災は忘れてはいけないものであり、復興はまだ終わっていない。そこで、東日本大震災からの復興はどのようなものでなくてはならないのか、以下の手順で考察する。本論文では、まず阪神淡路大震災からの復興事業における失敗例と、筆者自身の東北ボランティア研修での経験を述べ（Ⅱ章）、次にその失敗の原因と経験からの考察をふまえ、復興において、被災者のエネルギーの必要性が分かる事業を示し（Ⅲ章）、さらに様々な思いをつなげる事業を示す（Ⅳ章）。最後に、それらの事業から、本当の復興とは何なのかを考察していく（Ⅴ章）。

Ⅱ　復興への思い

（１）東北の現在と復興の失敗例

東日本大震災からの復興について復興庁[2]によると、がれきの撤去は 99.9%終わり、公共インフラにおいても水道施設は 96%、下水道は 99%終了しているという[3]。しかし、NHK によるアンケートによると、約 65%の人が復興が遅いと感じている[4]。津波の目に見える爪痕である瓦礫が無くなり、生活に欠かせない水が普通に使えるようになっても、被災者は復興を実感していない。復興が遅いと感じる人が最も多かったのが「住まい」に関してで、約 80%に上る[5]。まだ安心して生活できない状態が続いているのである。さらに、メディアに取り上げられることも減り、東日本大震災が起こったという事実の風化を感じている人は約 80%となっており、最も多かった理由は「政府の支援策」である[6]。政府の復興政策に不満があることが分かる。

早急な復興事業が望まれるが、それは被災者に寄り添ったものでなくてはならない。災害後の被害のことを「復興災害」という。復興災害とは、復興の間に仮設住宅で孤独死をしたり、町や村が衰退したりすることをさす。被害を少なくするためには、事前の防災対策や緊急対応だけでなく、復興災害を防ぐための取り組みが欠かせない[7]のである。

阪神淡路大震災からの復興事業において、実際、地域の現状に合わず、失敗した事例がある。阪神淡路大震災の復興災害といわれているのが新長田の再開発事業である。この事業は神戸市が決定した都市

---

[1]復興庁「全国の避難者等の数（平成 27 年 10 月 30 日）」
（http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat2/sub-cat2-1/20151030hinanshasuu.pdf　2015 年 11 月 5 日取得）
[2]果断に復興事業を行うため、内閣に設置された組織
[3]復興庁「復興の現状（平成 27 年 10 月 9 日）」
（http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat1/sub-cat1-1/20151009_genjou.pdf　2015 年 11 月 5 日取得）
[4]NHK「『被災者 700 人の声』アンケート調査」（http://www3.nhk.or.jp/news/shinsai4/enquete/　2015 年 6 月 25 日取得）
[5]同前
[6]同前
[7]塩崎賢明『復興〈災害〉－阪神淡路大震災と東日本大震災』（岩波新書　2014 年 p.ii）

計画の１つであり、20 ヘクタールという当時[8]西日本最大の規模の大きさや 44 棟もの高層ビルを建てるという計画内容は、他の事業と比べ特異なものであった。当初 2003 年度末完了予定だったこの事業は何度も延長され、現時点では、震災から 23 年後にあたる 2017 年度末に変更されている。この事業によって造られた再開発ビルは、豪華な見た目に反し、その中はシャッターだらけで、多くの商店主が苦しんでいる。この事業を行うにあたり、事業区域のすべての土地や建物は行政に買い取られることが初めから決定していた。つまり、住民の意見がどうであろうと、行政の思い通りにできるのである。それにより、地元事業者は地区から転出するかビルに入るかの選択肢しかなく、入るにあたっての巨額な借金や、ビルの不動産価値の崩壊など、大きな負担を背負っているのだ。その地域の特性を無視した巨大なハコモノ事業は、ただのお荷物になってしまっている[9]。

このように、被災者の意見や被災地の特性を無視した行政主体の事業は失敗する。その地域に似合わない過大な施設は運用しきれない[10]のである。どんなに巨額の資金を投じ、再開発事業を行っても、外形的な復興[11]は本当の復興とはいえない。

（２）何を「忘れない」のか

筆者は 2015 年 3 月 12 日から 14 日に行われた中央大学杉並高校の東北ボランティア研修に参加した。報道のような間接的な情報を得るだけではなく、実際に自分の目で見たいと思ったのだ。報道が全てを表しているとは思っていないつもりだった。

まず筆者が見た震災の爪痕は、道の周りに何もないことだった。そこにあったはずの家は土台を残し津波で破壊され、瓦礫として撤去されてしまった。報道で瓦礫の山がなくなった風景を見たときは、復興は進んでいる、被災者が東日本大震災を思い出し辛くなることも減るだろうと、単純に考えていた。しかし、瓦礫がなくなり家の土台だけが残っている光景を見て、確かにそこには日常があったのであり、まだその日常はほとんど戻っていないことを感じた。瓦礫がなくなったことで状況は良好、被災者の日常が戻ってきていると勘違いしていたことが恥ずかしかった。

研修では岩手県釜石市にある旅館、宝来館でその女将、岩崎昭子さんに講話をしていただく機会があった。女将は津波にのまれており、宝来館も津波で破壊されている。それにもかかわらず女将は筆者たちを笑顔で迎えてくださった。そんな強い女将が講話で被災したその瞬間の話のときだけ涙を見せた。女将のように前向きで、まるで東日本大震災を乗り越えたかのように見える人でも、やはり思い出すのはとても辛いことなのだと実感した。辛い体験を話してくださった女将のおかげで、筆者は被災者の方々の本当の辛さを知ることができ、命の尊さにも気付かされ、女将が生きていてよかったと思った。

筆者は実際に東北に行ったことで、未だ苦しんでいる人が大勢いることや、思い込んでいたことの多さを実感した。また、研修でお会いした方々は辛い経験をしながらも、復興のために前向きに活動しており、力になりたくて行った筆者たちが逆に元気づけられた。被災者の方に同情するのではなく、頑張っている被災者の方の手伝いがしたいと思えた。

研修を通し、1 番印象に残っているのは、多くの被災者の方に「忘れないで」と言われたことである。言われたときには「それだけでいいのか」と不思議に思った。しかし今、憶えていなくてはいけないのは、知識としてではなく、教訓としての東日本大震災なのだと思う。筆者は東北研修に参加し、東日本大震災による犠牲を無駄にしないため、東北の現状を勘違いしないため、「忘れない」ことの大切さを学

---

[8]1995 年 3 月 17 日
[9]塩崎前掲書 p.40-50
[10]森本尚樹「宮城・女川町復興を『失敗例』神戸教訓に民間主導で」（『神戸新聞 NEXT』2015 年 3 月 8 日 http://www.kobe-np.co.jp/news/shakai/201503/sp/0007799723.shtml ）
[11]木村信行「震災 20 年　復興の課題と成果は　有識者に聞く」（『神戸新聞 NEXT』 2015 年 1 月 4 日 http://www.kobe-np.co.jp/news/bousai/201501/sp/0007631869.shtml ）

んだ。
　本稿では、阪神淡路大震災における失敗例と東北研修での経験をふまえ、東日本大震災後に行われている事業の例から、本当の復興とは何か考察していく。

Ⅲ　被災者のエネルギー

（１）地元だからつながる復興

　津波に店を流されながらも再び立ち上がった企業は多くある。「金のサンマ」や「ぶっかけ海鮮丼」などで全国的に有名な気仙沼の斉吉商店は、商品を作るのに重要な「かえしだれ[12]」を瓦礫の中から見つけ出し営業を再開した。避難用にと真空パックに詰めてあったたれを、従業員が見つけ出したのである。津波により店が無くなってしまったため、そのたれを見つけたといってもすぐに営業再開できるものではない。それでも、そのたれは斉吉商店にとって気持ちを奮い立たせてくれる代物[13]であったという。
　斉吉商店が営業再開を決意しても、全ての材料を自力で作っているわけではないため、ほかの店などとの連携が必要である。斉吉商店と震災前からつながりがあったのが老舗の醸造業の陸前高田の八木澤商店である。八木澤商店の社長の河野通洋は震災発生後すぐに、斉吉商店の専務の斉藤和枝に以下のように言われたという。

> 「八木澤さん、タレいつ作ります？　まず海鮮丼からはじめようと思っているから、八木澤さんのタレがないと、斉吉商店は、操業再開できませんから！」[14]

　この言葉はプレッシャーを与えているように感じられるが、斉吉商店は八木澤商店以外のタレを使う気はないと言っているのである。斉吉商店はある意味１番大切なかえしだれがあり、やろうと思えばすぐに商品を作ることが出来る。しかし、震災前の味と交流にこだわり、八木澤商店との仕事を望んでいる。１つの店だけが復活しても、復興は進まない。いくつかの店と共に再開を目指すことで町を元気づけようとしているのだ。
　お互いに被災した店が共に再開しようとするのは難しい。残ったものや出来上がる早さはどうしても異なってしまうからだ。しかし、震災前からの交流は、初めからつながりを作り直すのに比べ、お互いに必要なものを分かっていることから余計な相談はなくなる。お互いに被災したことにより、被災地のニーズも知っていること前提で話を進められる。さらに、知っている店が頑張ることで他の店のやる気にもつながる。被災地の中で材料を集めるのは難しい。しかし、１つの店が動くことでその流れは大きく広まっていく。まず自分の店を取り戻そうとしたエネルギーは、いずれ復興のための大きなエネルギーとなる。

（２）被災者を励ます祭り

　岩手県九戸郡野田村の小田祐士村長は震災直後から、被災したその年の８月終わりも毎年恒例の祭りを行おうと決めていたという。しかし、野田村は津波で３分の１近くが流され、祭りに否定的な人もおり、「こんな状態でやれるのか？」という意見もあった[15]。被災してたった６ヶ月しかたってない状況にいた人々にとって、祭りは無駄であり、騒げる気分でも無い。しかし小田村長は以下のように述べている。

---

[12]醤油や砂糖や酒をあわせた「たれ」でサンマを炊くときにサンマからもエキスが染み出る。その炊き上がった後の煮汁を濾しとり、決まった濃度に煮詰めたもの。
[13]糸井重里・ほぼ日刊イトイ新聞『できることをしよう。ぼくらが震災後に考えたこと』（新潮文庫　2015 年　p.154-158）
[14]糸井重里・ほぼ日刊イトイ新聞前掲書　p.195
[15]イースト・プレス編集部『被災地復興で本当にあった忘れてはいけない話』（文庫ぎんが堂　2013 年　p.148-149,151）

祭りは損得がなくて、年寄りから子どもまでいろんな人間が一緒になって楽しめて、元気が出る。たとえそれが、カラ元気でもいいんだよ。[16]

一瞬で変わってしまった故郷を前にして、多くの人々が安らぎの場を失ってしまった。避難所では、周りの目が気になり話すら普通には出来ない。そのような中で震災前と同じことをやり、みんなで騒ぐことはとても重要なことである。たとえカラ元気でも、前を見るきっかけには十分なる。しかし、祭りを行うにあたり問題があった。野田村の祭りには、上組、中組、下組の、3 基の山車が出るのが恒例だったが、震災で 2 組の飾りや道具が流されてしまっていた[17]のである。それでも、１つの山車を共同制作し、祭りにはたった１つしかないが 3 組の思いがつまった山車が使われた。祭りの当日はもちろん、準備から村人たちが参加したのだ。

東日本大震災の発生からわずか６ヶ月後という早さと、瓦礫の撤去すら終わっていない状況で、祭りを行うことに消極的な人もいたのにもかかわらず、復興イベントとして行われた野田村の祭りは例年以上の盛り上がりを見せたという。つまり、人々は元気になれるものを欲していたのである。筆者は、被災した直後は傷を癒すために、日々静かに過ごし、盛り上がる気にはならないと思っていた。しかし、被災者が溜め込んでいるものを吐き出させたり、発散させたりするのも重要なことだと分かった。祭りという一見震災後には合わないものが復興へのエネルギーとなるのはお互いの辛さを知っていて、協力できる地元発信の事業ならではだ。遠くの部外者の当たり障りのない応援よりも、地元の被災者の気持ちを込めた荒療治の方が、復興へのエネルギーとなる場合もある。

津波で壊された故郷には、被災者の以前の当たり前な日常や風景がなくなってしまっている。そのような状況で、地元企業の再開や、毎年恒例の祭りは短い間ではあるが、なくなってしまった日常に浸ることができる。また、その場に地元を離れてしまった人も来ることで、震災前のように気心の知れた、落ち着く相手とも交流できる。地元の味と共に会話を楽しんだり、祭りで盛り上がったりするのは、辛いことの多い中で一瞬の楽しみに過ぎない。しかし、そこで生まれる、久しぶりに会った相手と再び結んだつながりや、同じ辛さを経験し一緒に過ごす新しい仲間との関係は、その一瞬で終わるものではない。中々会えなかったり、他人の手助けをするのが難しい状況であったりしても、辛いのは自分だけではないと思えれば、前を向けるようになる。被災者同士のつながりは、お互いに辛い経験をしているからこそ、前へと進むエネルギーを広げていけるのである。

Ⅳ　復興を促すつながり

（１）フラガール全国きずなキャラバン

被災者自身も故郷を、人々を元気づけようと活動している。その１つが福島県いわき市にあるスパリゾートハワイアンズのフラガールが行った「フラガール全国きずなキャラバン」である。いわき市の避難所をまわる慰問公演から始まり、26 都道府県 124 ヵ所、公演回数 245 回に及んだ[18]。

元気を出すためにはまず、傷を癒さな[19]くてはいけないと考えたフラガールたちは、穏やかでやさしい曲調を中心とした[20]、慰問公演のためのプログラムを作った。時には、フラガールの故郷の人々が集まる避難所にも行き、辛く泣きたくなるような状況でも笑顔で踊り、多くの被災者を癒し続けた。

全国きずなキャラバンは一般公演も行われている。東北の復興のためには観光客が戻ってくる必要が

[16]イースト・ブレス編集部前掲書 p.151
[17]イースト・ブレス編集部前掲書 p.152
[18]清水一利『フラガール 3.11』（講談社　2011 年　p.117）
[19]清水前掲書　p.114
[20]清水前掲書　p.114

あるからだ。一般公演は新宿高島屋から始まった。この時、リーダーのマルヒア由佳理[21]は挨拶で次のように述べている。

みなさん、こんにちは。
私たちは、福島県いわき市にあるスパリゾートハワイアンズからまいりました。
スパリゾートハワイアンズは現在休館していますが、フラガールは全員元気です。
いまから 46 年前、私たちの先輩である当時のフラガールが、地域や仲間とのきずなの力で、炭鉱が閉山になる危機に果敢に立ち上がったように、今度は、私たちが立ち上がります。
日本中に、笑顔、元気、希望をお見せします。
そして、多くの方々とのきずなを深めていきたいと思っています。
地元いわき市、福島県のために、私たちができることは、元気に踊りを披露することです。
今日は、お越しいただきましてありがとうございます。[22]

この挨拶で、フラガールは被災者として支援を貰おうと活動したのではないことが分かる。1 番の目的はフラ[23]を見てもらい、福島に興味を持ってもらうことだ。しかし、それだけでは無く、日本中を元気づけようとしている。

原発事故の風評被害の中、フラガールが作ったきずなは、福島県への興味を持たせ、まずはボランティアとして、その後は観光客として福島県や東北に人の流れをつくる。東日本大震災によって、なくなってしまった人の流れが回復しなければ東北の活気は戻らず、復興も終わらない。フラガールは全国を元気づけながら、故郷の早い復興を目指し、きずなをつないだのである。

（2）記憶風化を防ごうとした地元新聞

筆者自身が東北へボランティアに行ったとき、「ただ忘れないでほしい」と多くの方に言われたというのはすでに述べた。しかし、東日本大震災の記憶風化は、援助が減少するだけではなく、復興は終わったという勘違いを生んでいる。津波や瓦礫の映像だけでも恐怖を感じ、東日本大震災を忘れようとする人は多いため、記憶風化の防止は難しい問題だ。その問題に取り組んだのが、岩手日報の地元記者たちである。

岩手日報は、東日本大震災の犠牲者・行方不明者１人１人の人生の一端を紹介する追悼企画「忘れない」[24]を行っている。岩手県の死者は 4673 人、行方不明者は 1126 人である[25]。そのような大きな数字に気をとられ、１人１人の命の重さには目が向けられない。これは死者への冒涜だ。岩手日報は犠牲者の生きた証しを記録することによって尊厳を守[26]ろうとしたのである。亡くなった人々の命の重さを知ることは、また同じことを起こさないための教訓となる。新聞に、活字にすることにより、その教訓は未来に正確に伝えられる。

東日本大震災発生時、何度も想定外という言葉が使われた。まさか防波堤をも超えるような 10 メートル以上の津波がくるとは誰も思っていなかったのだ。しかし、三陸沿岸の先人も津波の被害を受け、多

[21]本名は加藤由佳理。マルヒアはハワイアンネームで、ハワイ語で穏やかや落ち着いたという意味がある。スパリゾートハワイアンズではソロダンサーになると貰える（条件は場所によって異なる）。
[22]清水前掲書　p.118-119
[23]フラはハワイ語で「ダンス、踊る」という意味で、日本で言われているフラダンスでは「ダンスダンス」となってしまう。ハワイではフラと言うのが一般的。
[24]下屋敷智秀「追悼企画『忘れない』取材の現場から」　岩手日報社編集局著『風化と闘う記者たち　忘れない　平成三陸大津波』（早稲田大学ブックレット　2012 年　p.54）
[25]警察庁「平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震の被害状況と警察措置」（https://www.npa.go.jp/archive/keibi/biki/higaijokyo.pdf 2015 年 11 月 5 日取得）
[26]東根千万億「記憶の風化と闘う　地元新聞社は被災地と運命共同体」　岩手日報社編集局前掲書　p.4

くの犠牲者を出すたびにその恐ろしさを後世に伝え残してきた[27]。その教訓を、記憶が薄くなってきたときに起きた東日本大震災では活かせなかったのである。東日本大震災の大きな被害は想定外ではなく、人間の慢心によるものだ。記憶風化の防止は、防災にもなるのである。東日本大震災を忘れてはまた教訓を活かせない。

「忘れない」は、被災者への追悼の意を示すとともに、教訓を忘れないための企画である。悲劇を思い出させるこの企画は取材を受けた遺族にとって辛いものだ。それでも、生きた証しはもちろん、未来に教訓をつなごうと話をした人がいる。教訓を忘れて同じような想定外が起こらないよう、犠牲者の命と遺族の思いの重さを胸に刻み込まなくてはならない。

復興のためには東日本大震災によって東北から離れてしまった人々が戻ってこなくてはならない。復興において、ボランティアや観光客など、東北へと人の流れを作ることは重要である。ボランティアが多ければ作業は速く進み、観光客が集まれば東北にお金を落としてくれるからだ。「フラガール全国きずなキャラバン」のように、被災地から離れた場所に住む人とつながることは、思い出す機会が減っている人々に被災地の「いま」を知ってもらい、東北に興味を持ってもらえる。おそらく、東北のことをわざわざ宣伝しなくても、何年か後には東日本大震災を忘れた人々が東北に来るようになるだろう。しかし、忘れたことで人が集まるのではいけない。東日本大震災の発生とその被害を忘れては、同じような大震災が起きたとき、また大きな被害が出てしまう。たくさんの尊い命がなくなってしまったことを無駄にしないために、東日本大震災の教訓は活かさなければならないのだ。

V　本当の復興とは

阪神淡路大震災において行われたその地域の特性に合わない復興事業は、その地域をよく知っている地元の被災者の声を聴かなかったために失敗してしまった。被災者がその事業に熱心に取り組めるような、被災者のエネルギーが向けられるようなものであれば造って終わりにはならなかった。政府が良かれと思った事業と被災者が望む事業は異なる可能性がある。政府がやらなくてはならない復興事業は、ただ場所を提供するだけではなく、そこが被災者の居場所になるようにすることだ。

居場所を作るには、その地域をよく知っている被災者のエネルギーが必要である。被災者自身が関わることで、ニーズにあわせた復興事業を行える。もちろん、被災者１人のエネルギーでは足りない。被災者同士のつながりは、前に進むための勇気を広げていける。お互いの辛さが分かるからこそ、手を取り合って進むことができるのである。

被災者がエネルギーを取り戻しても、被災し失ったものが多いため、外部の力が必要になる。復興にはボランティアも観光客も含め人手が必要である。被災者と離れた場所で生活する人々とのつながりは東北への興味を生む。東北への人の流れを作ることは復興において重要である。

しかし、ただ人の流れが戻ればいいというものではない。震災の発生を忘れたことで人が集まるようになってしまっては、また大震災が起きた場合に東日本大震災の教訓を活かせず、大きな被害が出てしまう。たくさんの尊い命がなくなったことを無駄にしてはいけない。さらに、記憶の風化は復興を遅くしてしまう。勝手に復興は終わったと勘違いしていては、注目度が下がり続け復興は中々終わらない。教訓として東日本大震災を忘れず、東北に人が集まる必要があるのだ。

本当の復興とは、その地域の特性にあった事業を被災者自身が行い、震災で離れてしまった人々が教訓を忘れないで戻ってくることである。東日本大震災の発生と、犠牲になった方の命の尊さを忘れず、教訓を未来へ受け継がなくてはならない。

（7786 文字　原稿用紙 19.2 枚相当）

[27]下屋敷智秀「追悼企画『忘れない』取材の現場から」岩手日報社編集局前掲書　p.64

【参考文献及び関連ＵＲＬ】

◆イースト・プレス編集部『被災地復興で本当にあった忘れてはいけない話』(文庫ぎんが堂　2013 年)
◆糸井重里・ほぼ日刊イトイ新聞『できることをしよう。ぼくらが震災後に考えたこと』(新潮文庫　2015 年)
◆岩手日報社編集局著『風化と闘う記者たち　忘れない　平成三陸大津波』(早稲田大学ブックレット 2012 年)
◆NHK「『被災者 700 人の声』アンケート調査」(http://www3.nhk.or.jp/news/shinsai4/enquete/)
◆清水一利『フラガール 3.11』(講談社　2011 年)
◆木村信行「震災 20 年　復興の課題と成果は　有識者に聞く」(『神戸新聞 NEXT』 2015 年 1 月 4 日 http://www.kobe-np.co.jp/news/bousai/201501/sp/0007631869.shtml)
◆警察庁「平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震の被害状況と警察措置」(https://www.npa.go.jp/archive/keibi/biki/higaijokyo.pdf)
◆塩崎賢明『復興〈災害〉－阪神淡路大震災と東日本大震災』(岩波新書)
◆復興庁「全国の避難者等の数(平成 27 年 10 月 30 日)」(http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat2/sub-cat2-1/20151030hinanshasuu.pdf)
◆復興庁「復興の現状（平成 27 年 10 月 9 日)」(http://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat1/sub-cat1-1/20151009_genjou.pdf)
◆森本尚樹「宮城・女川町復興を『失敗例』神戸教訓に民間主導で」(『神戸新聞 NEXT』2015 年 3 月 8 日　http://www.kobe-np.co.jp/news/shakai/201503/sp/0007799723.shtml)